

# 今日の英語にみる等位構文 *and nor* と *but nor* の 生起について

松 元 浩 一

## On the Occurrence of Coordinate Constructions *and nor* and *but nor* in Present-day English

Koh-ichi Matsumoto

### 1. はじめに

今日の英語の等位接続詞 *nor* は、(1) に見るとおり、二つの文の間にひとつ生起するのが一般的である。

- (1) a. He was one of those people who can't relax. *Nor* did he have many friends.  
(Huddleston and Pullum 2002: 1309)
- b. "I haven't got a copy of club rules." "*Nor* have I." (Biber et al. 1999: 915)

両例ともピリオドによって独立した二文の間に *nor* が生起しており、(1a) では両文の本動詞は異なっているが、(1b) では同じ本動詞 *got* が現れ、後続の文で動詞句削除が起こっている。*nor* のような等位接続詞は、次例 (2) のとおり、連続して生起することは許容されないのが通例である。(以下、用例に付した '%' は容認度が低いことを、'\*' は容認されないことを表す)。

- (2) a. %The Germans haven't yet replied *and nor* have the French. (Huddleston and Pullum 2002: 1309)
- b. \*He was unhappy about it, *and but* he did what he was told. (Quirk et al. 1972: 555)
- c. \*He asked to be transferred, for he was unhappy, *and for* he saw no possibility of promotion. (Quirk et al. 1972: 555)

ところが次例 (3) に見るとおり、今日の英語には、*nor* が二文の間に *and* や *but* と連続して生起する例が観察される。上記 (2a) は、Huddleston and Pullum (2002) において一般的に容認されにくい(方言のみで使用)とされるが、実際は (3) に挙げる実例が観察される(以下の引用例中の斜字体は筆者による)。<sup>1)</sup>

- (3) a. Human intelligence does not, in the main, rely on behaviour patterns fixed by

- evolution, *and nor* does it depend on habit learning. (Jonathan St. B. T. Evans. 2017. *Thinking and Reasoning: A Very Short Introduction*, Oxford University Press, p. 19)
- b. Ruth didn't turn up, *and nor* did Kate. (Swan 1995: 358)
- c. Such policies are not cheap or easy, *but nor* is the waste of black American's talent. (cited from the British National Corpus Online service [1985-1993年間に刊行された英国雑誌より2022年6月14日検索])
- d. These are not moments of thirst ...; *but nor* are they causes of drunkenness. (Biber et al. 1999: 81)

以下、小論では用例(3)に挙げた文や節を接続する等位構文 *and nor* と *but nor* の生起について論じる。<sup>2)</sup> まず次の2節で *and nor* と *but nor* の特性を明らかにし、3節でその分布を提示する。最後の4節において、それまでに明らかになった特性と分布をもとに両形式が関わる文法の拡張について論述する。

## 2. *and nor* と *but nor* の特性

前節(3)に挙げた用例は、*nor* が単独で生起している用例(1)と同じく、いずれも先行する否定文にさらに否定の意味を累加している。以下、用例(3)がもつ特性を考察するのに、ここで各例を再び提示する(各例の出典は重複することから省略する)。

- (3) a. Human intelligence does not, in the main, rely on behaviour patterns fixed by evolution, *and nor* does it depend on habit learning.
- b. Ruth didn't turn up, *and nor* did Kate.
- c. Such policies are not cheap or easy, *but nor* is the waste of black American's talent.
- d. These are not moments of thirst ...; *but nor* are they causes of drunkenness.

上に挙げた(3a),(3c)は、二つの等位節の間に *and* や *but* と *nor* が生起し両節の動詞が異なっているが、(3b)は、両節の本動詞が同じ *turn up* で、後続の節では動詞句削除が起こっている。これらの点は、先の *nor* が単独で生起している用例(1)と共通した特徴である。

ところが Fowler (1984: 395, 1926<sup>1</sup>) は(3)の例を「ぎこちない("clumsy")」という。<sup>3)</sup> Biber et al. (1999: 80) も、*and* にはしばしば副詞の *neither* が後続し、*nor* が生起するのは稀であると述べている。事実、Huddleston and Pullum (2002: 1310, note 30) によると、(3)は今日のアメリカ英語には見られず、イギリス英語でも散見されるに留まるといふ。こうした稀有な分布の実態はその構造的特性によると考えられる。次の(4)の構造を仮定してみよう。

- (4) a. [s<sub>1</sub> ···]. [s' *Nor* [s<sub>2</sub> ···]]
- b. [s<sub>1</sub> ···], ([s<sub>1</sub> ···];) [s' *and nor/ but nor* [s<sub>2</sub> ···]]

上記 (4a) は前節 (1) に挙げた用例の文構造を表し, *nor* はピリオドにより独立した第2等位文 S2 に付加して生起している (cf. Imai et al. 1995: 194; Huddleston and Pullum 2002: 1277; Huddleston and Pullum 2005: 226)。他方 (4b) は, (3) に挙げた用例の文構造を表しており, *nor* はコンマ等により分離された第2等位節 S2 に付加して生起している。このとき, S' 節内の節頭の位置には *nor* のほかに *and* (または *but*) の二つが現れていることになり, いわば接続詞の「二重詰め」が生じていると考えられる。このような構造的配置は他の接続詞には観察されない。<sup>4)</sup> つまり, 一般的に等位接続詞は連続して生起しないが, (3) の *and nor* や *but nor* は連続して生起している点が特徴的であり, かえってそのことが「ぎこちない」, 稀であると評されることに結びついている。この現象は先のイギリス英語に散見されるに過ぎないという指摘から, (1) は等位構文に関与する文法が創り出す中心的事例であるのに対して, (3) は周辺的な事例であると考えられる。

そのほかに等位接続詞 *nor* は, 他の接続詞とは異なり, 否定の極性を帯びる特性を有している。この特性は, 先に示した用例 (1), (3) に倒置現象が義務的に起こっていることから窺える。

一般に否定倒置は, 否定要素が文頭 (又は節頭) に生起することが「引き金」となり, 主語と操作子 (ここでは助動詞) に語順の逆転が起こる。否定要素は否定の極性を帯びている副詞が典型的であるが, (1), (3) に挙げるとおり, 等位接続詞 *nor* も否定要素として機能する。ただ, 否定副詞の場合, “I have *never* seen him.” と “*Never* have I seen him.” に見るとおり, *never* の移動が関与しているのに対して, 等位接続詞 *nor* は接続詞であることから移動には関与しない (\*I have *nor* seen him. > *Nor* have I seen him.)。つまり, 否定倒置は, 否定要素の移動の有無に関わらず, 否定要素が文頭 (又は節頭) に生起することが要因となって起こる。

否定の極性を帯びた *nor* はまた, ほかに他接続詞とは異なる特徴が見られる。2節において *and* にはしばしば副詞の *neither* が後続するという Biber et al. (1999) の観察に言及したが, 次例 (5) に示すとおり, *neither* は *nor* と意味的に等価であり, *nor* に置き換えることが可能である (cf. Quirk et al. 1972: 565; 1985: 937)。

- (5) a. They never forgave him for the insult, *and neither* could he rid himself of feelings of guilt for having spoken that way.  
 b. They never forgave him for the insult, *and nor* could he rid himself of feelings of guilt for having spoken that way.  
 c. They never forgave him for the insult, *but neither* could he rid himself of feelings of guilt for having spoken that way.  
 d. They never forgave him for the insult, *but nor* could he rid himself of feelings of guilt for having spoken that way.

これらの用例では, *neither* は第2等位節内の構成要素であるが, その *neither* の代用として *nor* が機能している。ゆえに等位接続詞 *nor* は, 副詞の *neither* と同じく, 第2等位節内全体に否定の影響を及ぼし, 主語と操作子の倒置を引き起こしていると考えられる。つまり等位接続詞 *nor* は, 先行する第1等位節よりも, 第2等位節内の構成要素に作用

しそれらと密接に結びついている。したがって *nor* は、機能的に見ると、副詞的という点で典型的な等位接続詞とは異なる特性を有しており、その点でも、用例 (1) の等位構文を創り出す文法が文法体系の中核を成すのに対して、(2a),(3),(5b),(5d) に挙げた等位構文を創り出す文法は体系の周辺に位置すると考えられる。

### 3. *and nor* と *but nor* の分布

前節でふれたとおり、Huddleston and Pullum (2002: 1310, note 30) は、等位接続詞が連続する *and nor* と *but nor* の現象 (用例 (3)) は今日のアメリカ英語には見られず、イギリス英語でも散見されるに過ぎないという。そこで本節では、イギリス英語は BNC (British National Corpus) を用いて、アメリカ英語は COHA (Corpus of Historical American English) を用いて *and nor* と *but nor* の実際の分布の一端を明らかにする。

今日のイギリス英語を収めている BNC は、1991年から1995年の間に3つの出版社 (Oxford University Press, Longman Group Ltd., and Chambers), 2つの大学 (Oxford University and Lancaster University), 一つの図書館 (The British Library) が共同で開発した共時的オンライン・コーパスである。4000超のテキストを含む約1億語から構成され、1960年から1993年までの資料 (1985年から1993年までの資料が91%を占める) を収録している (cf. Hoffmann et al. 2008: xiii and 27ff)。

このコーパスを検索ツール BNCweb を用いて *and nor* の使用状況について調査すると合計110例が観察された (2022年6月14日検索)。用例は全て1985-1993年の間に観察されたものであり、written style (academic prose, newspaper, periodicals, prose fiction など) が101例と圧倒的に多く見られ、spoken style (conversation, debate, interview, meeting) は9例のみであった。

また *but nor* は、1985-1993年の間に合計48例が観察され、written style が43例と圧倒的に多く、spoken style は5例であった。約1億語からなる電子コーパス中に *and nor* は110例であるから、概して100万語ごとに1回、*but nor* (48例) は220万語に1回の頻度で現れており、Huddleston and Pullum が指摘するとおり、その分布は極めて稀にしか見られないと考えてよい。<sup>5)</sup>

他方、アメリカ英語を収集している COHA は、Brigham Young University (BYU) の Mark Davies 氏が開発したオンライン・コーパスで2021年に更新されている。2022年9月5日時点において、総語数4億7500万語、10万超のテキストから成り、アメリカの草創期に当たる1820年から2010年代に至る約200年間の通時的資料を収めている。

その COHA によれば、アメリカ英語には1953年に *and nor* の例が見られる。1820年以降の200年間のうち実例が観察され始めるのは1950年頃からであり、2010年代までの60年間にわずか24例しか見られない。*but nor* にいたってはより遅い1977年に観察され、以後2010年代までの約30年間にわずか8例が見られるのみである (以上、2022年9月5日検索)。これら32例は、*and nor* も *but nor* も BNC に見られた例と同じく written style が圧倒的で spoken style はごく稀である。<sup>6)</sup> 出現頻度は、1820年以降の200年間を通じて *and nor* の24例はおおよそ1900万語に1回、*but nor* の8例は6000万語に1回の割合であることから、両形式ともアメリカ英語にはほとんど見られないと言ってよい。今後の出現動向は不明であるが、現時点ではこの200年間においてほとんど分布していないことから、ア

アメリカ英語には見られないとする Huddleston and Pullum の記述に符合する。

本調査を通じて *and nor* と *but nor* はイギリス英語にごく稀に観察されるに過ぎず、アメリカ英語にはほとんど見られないことが明らかになった。ただアメリカ英語も、20世紀中頃から21世紀初めにかけて用例がごくわずかに見られることから、以下にその分布を示す。*and nor* は実例が観察された年代ごとに1例挙げ、*but nor* は観察された8例全てを挙げる（以下の引用例中の下線は筆者による）。

Decade	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s	2010s	Total
<i>and nor</i>	0	0	0	0	2	0	3	1	9	3	6	24
<i>but nor</i>	0	0	0	0	0	0	1	0	4	2	1	8

(i) *and nor*

[1953] Are you a demon? Quite! Hey! Smart boy! Take him to the volcano tomorrow and keep him there. Neither will this devil exist, and nor will our mangoes be stolen. I am hungry! (fiction)

[1970] It is obvious to him that the king knows nothing: if he lid, he would not be where he is. and [sic] nor would we. (magazine)

[1988] I think it's safe to say that we're not crazy about each other. I'm not gonna let that get in the way of running the company. Of course you're not, and nor am I. (fiction)

[1999] When Peacocke says that neither object is red to a greater degree than the other, and nor are they equally red, I read him as meaning it is false that either object is red to a greater degree than the other...(Non-fiction or Academic writings)

[2007] and the American people have no major role to play and nor should they because after all they don't have the knowledge or capability to be responsive to the real situation. (Non-fiction or Academic writings)

[2011] I know you believe Conrad to be some sort of criminal, but... he didn't do this. And nor did his friends. (fiction)

(ii) *but nor*

[1977] Surprises can not be ruled out. But nor can the danger of a cruel civil war be ignored. (magazine)

[1997] He finds this conflict unendurable and must thus symbolically resolve it through psychotic sex crimes. Hers had little or no — she seemed simply to relate what literally happened without commenting one way or the other, or reacting. But nor was she disassociated or monotonous. (fiction)

[1998] It is not socially appropriate simply to display one's emotions as one feels them at all times, but nor is it desirable to maintain too tight a hold over them.

(Non-fiction or Academic writings)

[1999]...if they want to be let out of the house. Just as in *I Spy Junior*, the artwork and music are witty, beautifully done, and original (note to worried parents: the spooky-meter doesn't hit the saccharine *Casper* level, but nor is it truly scary to kids who frighten easily). (Non-fiction or Academic writings)

[1999] The word *Being* explains nothing, but nor does God. *Being*, however, has the advantage that it is an open concept. (Non-fiction or Academic writings)

[2004] I give you my gun. You'll shoot me dead. I will not shoot you, but nor am I walking down that mountain looking over my shoulder for you. (fiction)

[2005] They do not believe the murders to be the work of one man, but nor have they been able to link the crimes to any known criminals. (fiction)

[2019] No one described any system of government in this way. But nor did they talk about the Grand Experiment either. (fiction)

上記分布と实例から、イギリス英語でもアメリカ英語でも *and nor* と *but nor* の使用は *written style* に限定され、極めて低い頻度で漸次推移しており、今後両形式が発達するとしても時間を要すると思われる。

#### 4. 文法の拡張

本節では、これまで観察してきた言語事実を拠りどころとして、*and nor* と *but nor* の生起を規定している文法について考察する。

次に挙げる (4) は 2 節で示した *and nor* と *but nor* が現れる構造を再提示したものである。(4a) でも (4b) でも *nor* は第 2 等位節 S2 の外にある S' 節内に生起している。(6) から (8) に示す用例は、否定要素が現れる文内の位置を表している。否定要素が文中または文末にある場合が (6a), (7a), (8a)、文頭にある場合が (6b), (7b), (8b) である。文頭に生起するときは義務的に主語と操作子の倒置が起こる。用例中の '[t]' (trace) は、否定要素が文頭に移動する前に生起していたと考えられる統語上の位置を表している。

- (4) a. [s<sub>1</sub> ···]. [s' *Nor* [s<sub>2</sub> ···]]  
 b. [s<sub>1</sub> ···], ([s<sub>1</sub> ···] ;) [s' *and nor / but nor* [s<sub>2</sub> ···]]
- (6) a. I have *never* seen him.  
 b. *Never* have I [t] seen him.
- (7) a. I haven't seen him *either*.  
 b. *Neither* have I seen him [t].
- (8) a. We weren't friends at *any* time.  
 b. At *no* time were we friends [t]. (cf. with (8) Huddleston and Pullum 2002: 789)

一方、次の (9a), (10a) に挙げる等位接続詞 *nor* は、(9b), (10b) に見るとおり文中に生起する形式をもたない (以下の引用例中の '\*' はその節が非文法的であることを示す)。<sup>7)</sup>

- (9) a. He was one of those people who can't relax. *Nor did* he have many friends.  
 (= 1a)  
 b. ... \*He had *nor* many friends./... \*He *didn't* have many friends *or*./... \*He *didn't or* have many friends.
- (10) a. Ruth didn't turn up, *and nor did* Kate (= 3b)  
 b. ... \*and Kate *nor did*./,.. \*and Kate *didn't* turn up *or*./... \*and Kate *didn't or* turn up.

このように (9a), (10a) に示した *nor* によって引き起こされる倒置は, (6) の *never* や (7) の *neither* のそれとは異なり, 否定要素の移動は関与していない。等位接続詞 *nor* は, S2 内の位置から移動して節外の S' 内に生起しているのではなく, 移動には関与せず, もとより S' 内の節頭に生成している。

それにもかかわらず, 用例 (10a) に示すとおり, *nor* は *never* や *neither* と同じように S2 内において主語と操作子の倒置を引き起こす。つまり, S' 内にある *nor* は, S2 を構成する要素ではないが, S2 の構成要素全てに否定の力を及ぼすくらいに, S2 内の要素と密接に結びついていると言える。一方で, *and* 又は *but* の導入により, 先行する S1 節と後続する S2 節を連結する機能は弱化していると考えられるが, 依然として *and* や *but* が生起する S' 内の節頭の位置に残留したままになっている。<sup>8)</sup>

このような振舞いをする *nor* について, Quirk et al. (1972: 566) は, 通常の等位接続詞とは異なるものとして位置づけ, 純粋な等位接続詞群から除外することを示唆している。すなわち *nor* は, 否定を意味する副詞等と同じく, S2 内の要素と密接に結びついて義務的に倒置を誘導することから, *nor* がもつ本来の等位接続詞としての意味機能は「漂白され」(*semantic bleaching*), 等位接続詞というよりも否定要素 (NEG) として機能するようになったと考えられる。一方で, 漂白された *nor* の等位接続詞としての意味機能 (すなわち連結機能) は, 中心的な等位接続詞である *and* や *but* の導入によって代替され, 結果的に *and nor* や *but nor* の形式が派生されたと考えられる。

このような文法の拡張は, 次の (11) と (12) に示す段階を経て, *nor* のほかに文や節の連結機能を担う *and* 又は *but* が S' 節内の節頭に導入されて成立すると仮定される (cf. Kajita 1977 & 1997)。

- (11) a. G<sub>i</sub>: I have *never* seen him.  
 b. G<sub>i+1</sub>: *Never* have I [t] seen him .  
 c. G<sub>i+n</sub>: ... *and never* have I [t] seen him.
- (12) a. G'<sub>i+1</sub>: ... *Nor* have I seen him.  
 b. G'<sub>i+n</sub> (= G<sub>L</sub>): ... *and nor* have I seen him.
- (13) a. G<sub>i</sub> > G<sub>i+1</sub> > G<sub>i+n</sub>  
 b. G'<sub>i+1</sub> > G'<sub>i+n</sub> (= G<sub>L</sub>)
- (14) [s<sub>1</sub> ...], [s' *and nor* / *but nor* [s<sub>2</sub> ...]] > [s<sub>1</sub> ...], [s' *and* / *but* [s<sub>2</sub> *nor* ...]]

上に示した (11a) は文法  $G_i$  によって “I have *never* seen him.” が生成されることを表している。(11b) は、次の段階の文法  $G_{i+1}$  によって倒置文 “*Never* have I seen him.” が生成されていることを表し、(11c) は後続する文法  $G_{i+n}$  によって等位接続詞 *and* が導入され、先行する節に連結されて等位構文が生成されることを表している。

他方、(12a) の文法  $G'_{i+1}$  (*Nor* have I seen him.) は、(11b) の文法  $G_{i+1}$  (*Never* have I seen him.) と類似の機能 (倒置の生成) を有しているが、*nor* は *never* とは異なり、文中から移動した要素ではない (つまり、文中の要素が移動する前に生起していた位置 ‘[t]’ をもたない)。したがって (12a) では (11b) の文法  $G_{i+1}$  とは区別して別の文法  $G'_{i+1}$  が適用されている。換言すれば、(12a) の  $G'_{i+1}$  (*Nor* have I seen him.) は、(11b) の倒置文に関わる文法  $G_{i+1}$  とは異なり、それが対応する倒置前の構造 (11a) (= 文法  $G_i$ ) をもたない (cf. \*I have *nor* seen him. / \*I have seen him *nor*. / \*I haven't *or* seen him. / \*I haven't seen him *or*.)。そのことから、(12a) の  $G'_{i+1}$  (*Nor* have I seen him.) は統語機能上 (11b) の  $G_{i+1}$  (*Never* have I seen him.) と類似していても別個の文法として規定されている。

ここで (11c) の文法  $G_{i+n}$  (... *and never* have I [t] seen him.) を見てみよう。(11c) の  $G_{i+n}$  において、*never* は副詞であることから、先行する節と後続する節を連結するには等位接続詞 *and* が必要になる。他方、*nor* も倒置を起こすときは、自らが否定の力を及ぼす第2等位節内の構成要素と親和性が強く、一方で接続詞としての意味機能は漂白されていることから、*nor* に先行する節と連結するには等位接続詞 *and* が必要になる。その結果、倒置文を導く *nor* を規定している (12a) の文法  $G'_{i+1}$  は、(11b) の  $G_{i+1}$  が (11c) の文法  $G_{i+n}$  へと派生する過程をモデルにして、(12b) の  $G'_{i+n}$  (=  $G_L$ ) へと拡張したと考えられる。これら一連のプロセスを表示すると上記 (13) のようになる。この拡張プロセスにおいて、*nor* は等位接続詞というよりも否定要素と解され、代わりに、先行節と後続節を連結するのに *and* (または *but*) が導入されたと考えられる。<sup>9)</sup> つまり、(12b) の  $G'_{i+n}$  (=  $G_L$  “... *and nor* have I seen him.”) には、(14) に示した「統語的再解釈 (‘syntactic reinterpretation’)」が生じていると仮定される (cf. Kajita 1977: 50ff)。

以上の動的拡張のプロセスを支持している証左が見られる。次の例を見てみよう。

- (15) a. Uncle Andrew isn't a loveable character. *But then nor* are any of them really.  
(Jespersen 1949. VII, 66)  
b. \*... *But then* any of them *nor* really. / \*... *But then* any of them really *nor*.

用例 (15a) において *nor* は副詞 *then* の介在によって *But* から分離している。ここで先の用例 (9),(10) と比べてみよう。

- (9) a. He was one of those people who can't relax. *Nor did* he have many friends.  
(= 1a)  
b. ... \*He had *nor* many friends. / ... \*He *didn't* have many friends *or*. / ... \*He *didn't or* have many friends.  
(10) a. Ruth didn't turn up, *and nor did* Kate (= 3b)

b. ... \*and Kate *nor did.* / .. \*and Kate *didn't turn up or.* / ... \*and Kate *didn't or turn up.*

(9b), (10b) に見るとおり, *nor* は否定を意味する副詞とは異なり, もとより文頭に生起して, 文中や文末の位置から文頭に移動しているのではない。同様に用例 (15a) の *nor* も, (15b) に示す文中や文末の位置から前置されているのではない。つまり, 用例 (15a) の *nor* は副詞とは異なる特性をもつ。他方, *nor* のもうひとつの特性である連結の意味は漂白されてしまい, 等位接続詞の機能を保持しているというよりも, 後続文において倒置を引き起こす否定要素として機能している。その結果, *nor* は *But* から離れて間に *then* を介在させ, 自らの否定の力を及ぼしやすい, 第2等位文に隣接した位置に生起していると考えられる。ゆえに, 用例 (15a) は, (11b)  $G_{i+1}$  (*Never have I seen him.*) が (11c)  $G_{i+n}$  (*...and never have I seen him.*) へと派生する過程をモデルにして, “*Nor are any of them really.*” (= 12a の  $G_{i+1}$ ) が “*...But nor are any of them really.*” (= 12b の  $G_{i+n}$ ) に拡張した結果, *nor* は接続詞というよりも第2等位文に作用する副詞的な否定要素と解され, *But* に後続する副詞 *then* のあとに生起していると考えられる。

本節での考察をまとめると次のようになる。等位接続詞 *nor* は, 否定を意味する副詞等と同じく, 第2等位節内の全ての要素に作用して義務的に倒置を誘導する。このとき, *nor* は二つの節 (または文) の間に介在する形で生起しているにもかかわらず, 接続詞としての連結機能は薄れ, 本来, 第2等位節を構成する要素ではないが, 第2等位節内の要素と密接に結びついている。このように *nor* のもつ文形式と意味・機能の間に「ずれ (*discrepancy*)」が生じたことで, そのずれを解消するために等位構文に関与する文法が拡張し, *and* や *but* が導入されて統語的再解釈が起こった。その結果, *and nor* と *but nor* が生起したと考えられる。

## 5. まとめ

英語の等位接続詞は二つの節 (または文) の間にひとつ生起することを原則とする。等位接続詞 *nor* も, 統語的には二つの節 (または文) の間にひとつ生起し, 意味的には先行する否定節に否定の意味を累加する機能を担う。ところが今日の英語には, 二つの節 (または文) の間に, *nor* が *and* や *but* と連続して生起する例が観察される。その事例は, 二つの等位接続詞が連続して生起することから, 一般的な等位構文とは構造的に異なっている。このことは両形式の使用頻度と分布を見ても明らかである。小論による調査では, *and nor* と *but nor* の現象は今日のアメリカ英語にはほとんど見られず, イギリス英語でも稀に散見されるに過ぎないことが明らかとなった。

他方, 等位接続詞 *nor* は, 否定を意味する副詞等と同じく, 第2等位節内の全ての要素に作用して義務的に倒置を誘導する。このとき *nor* は, 二つの節 (または文) の間に介在して, 等位接続詞として本来生起する位置に現れているにもかかわらず, 接続詞としての連結機能はほとんど失われ, もとより第2等位節を構成する要素ではないが, 第2等位節内の要素と密接に結びついて否定の力を及ぼしている。このような *nor* の特性により, それがもつ統語形式と意味・機能の間にずれが生じてしまい, そのずれを解消するために等位構文に関与する文法の拡張と統語的再解釈が起こり, その結果, *and nor* や *but*

*nor* が導入されるに至ったと考えられる。2節に挙げた Fowler (1984, 1926<sup>1</sup>) は、20世紀初期にこの現象を評して“clumsy”と述べたわけだが、その見解は、本形式が文法の周辺に位置する現象であることや、極めて稀にしか見られない分布状況からも窺うことができよう。

## 註

- 1) 用例 (2a) について、Huddleston and Pullum (2002: 1309) は一般的に容認されにくい言語現象と述べるが、小西 (1991) や岩崎・諏訪部 (2000) は、接続詞 *nor* について「イギリス英語ではその前に *and* または *but* を入れることがある。」と記している。20世紀終わりに刊行されている学習用辞書やポケットサイズの小型辞書にもこのような言及が見られ、事実2017年にも (3a) に挙げる実例が観察される。
- 2) 小論は、節や文を接続している *and nor* と *but nor* に限定して言語事実を涉猟し、語や句を接続している次のような例は考察の対象から除外する。“Income taxes are calculated in terms of Mexican pesos when the transactions occurred *and nor* in terms of Mexican pesos as of the end of the periods.” (Desc, S. A. de C. V. ed. *Annual Report 2000*, 2000, p. 1)
- 3) Fowler (1984: 395) には次の記述が見られる。“The insertion of a clumsy and where *nor* should stand by itself is shown in: Mr. Burton never underestimates *Othello*, *and nor* in consequence do we. / The secret encouragement to Kruger from the Germans in 1899 is no part of school history, *and nor* is Kruger’s obstinate withholding of civic rights from the English burghers.”
- 4) 等位接続詞 *nor* が *neither* と相関する形式 *neither...nor* では、*nor* の前に他の等位接続詞 (*and* や *but* 等) は生起できない。例えば、\*“John *neither* has long hair, *and nor* does he wear jeans,” (Quirk et al. 1972: 567)。この事実について、Gazdar (1977: 88) や太田 (1980: 570) は、*both ... and* や *neither... nor* 等の相関的な等位接続詞は、単独で見れる *either* や *or* とは異なり、そもそも独立文を連結できないと興味深い指摘をしている (\**Neither* Mary will dance *nor* Tom will sing. / \**Neither* will Mary dance *nor* will Tom sing.)。しかし、本調査においては小論3節に挙げた例 “Are you a demon? Quite! Hey! Smart boy! Take him to the volcano tomorrow and keep him there. Neither will this devil exist, and nor will our mangoes be stolen. I am hungry! [1953]” が見られる。
- 5) BNC が収録している1億語の内訳は約9割が書きことば、残りの1割が話しことばである。両形式が *written style* に多く見られるのは、一部には言語資料のジャンル間に収録語数の不均衡があるためと考えられる。
- 6) COHA には検索語の出現数を10年ごとに明示する機能があるが、どの年代も *fiction* の構成比率が約50%を占めると言われており (cf. 塚本2011: 51)、ジャンルの偏りが *style* の分布に影響を及ぼしている可能性がある。
- 7) Quirk et al. (1972: 565) は、次例 (i) に挙げる *nor* は意味的には ‘not or’ ではなく、(ii) に示す ‘and not’ であると述べている。(i) “They never forgave him for the insult, *nor* could he rid himself of feelings of guilt for having spoken that way.”

(ii) “They never forgave him for the insult, *and* he could *not* rid himself of feelings of guilt for having spoken that way.” 他方、本文中の(9b)に挙げた “\*He *didn't* have many friends *or*./ \*He *didn't or* have many friends.” と (10b) の “...*and* Kate *didn't* turn up *or*./ … \**and* Kate *didn't or* turn up.” は、等位接続詞 *nor* が他の否定要素とは異なって移動に関与していないことから、文中や文末には移動前の統語上の位置を有していないことを表すために挙げたものである。したがって (9b), (10b) は、*nor* が意味的に ‘not or’ であることを前提にしているのではなく、表示の便宜上仮に *or* の位置を文中や文末に示したに過ぎない。

- 8) Huddleston and Pullum (2002: 1310) は、*and nor* の *nor* は等位接続詞 (coordinator) と考えている (“and hence is again best regarded as a coordinator”)。他方、Quirk et al. (1985: 937) は、*nor* はその意味を変えずに *neither* に置き換えられると述べ、*and* と *but* が先行文と後続文を連結しているという。つまり *nor* の連結機能は希薄であると言える。
- 9) なお (12a)  $G'_{i+1}$  (...*Nor* have I seen him.) は、類似の機能をもつ (11b)  $G_{i+1}$  (*Never* have I seen him.) が (11c)  $G_{i+n}$  (...*and never* have I seen him.) へと派生する過程をモデルにして (12b)  $G'_{i+n}$  (...*and nor* have I seen him.) へと拡張していると考えられるが、(13) に示した一連の文法発達の初期段階にある (11a)  $G_i$  (I have *never* seen him.) は、(12a)  $G'_{i+1}$  (...*Nor* have I seen him.) が拡張のモデルとする対象の外にある。そのため、 $G'_{i+1}$  (...*Nor* have I seen him.) が、文中に否定要素を含む  $G_i$  (I have *never* seen him.) の文法を参照して (12b)  $G'_{i+n}$  が “\*I have *nor* seen him.” を生成する文法へと推移することはない。

## 参考文献

### Primary Sources (Corpus)

BNC (The British National Corpus) : <http://www.natcorp.ox.ac.uk/>

COHA (The Corpus of Historical American English: 475 million words, 1820 - 2010s):  
<https://www.english-corpora.org/coha/>

### Secondary Sources

Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Longman.

Fowler, H. Watson. 1984[1926<sup>1</sup>]. *A Dictionary of Modern English Usage*. 2nd ed., rev. by Sir Ernest Gowers. Oxford: Oxford University Press.

Gazdar, Gerald. 1977. *Implicature, Presupposition, and Logical Form*. Indiana University Linguistic Club.

Hoffmann, Sebastian, Stefan Evert, Nicholas Smith, David Lee and Ylva Berglund Pryts. 2008. *Corpus Linguistics with BNCweb — a Practical Guide*. Frankfurt am Main: Peter Lang.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

- \_\_\_\_\_. 2005. *A Student's Introduction to English Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Imai, Kunihiko, Heizo Nakajima, Shigeo Tonoike and Christopher D. Tancredi. 1995. *Essentials of Modern English Grammar*. Tokyo: Kenkyusha.
- Jespersen, Otto. 1949. *A Modern English Grammar on Historical Principles Part VII: Syntax*. Heidelberg: Carl Winters.
- Kajita, Masaru. 1977. "Towards a Dynamic Model of Syntax." *Studies in English Linguistics* 5, 44-76. Tokyo: Asahi Press.
- \_\_\_\_\_. 1997. "Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language." In Masatomo Ukaji, Toshio Nakao, Masaru Kajita and Shuji Chiba eds., *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, 378-393. Tokyo: Taishukan.
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. Harlow: Longman.
- \_\_\_\_\_. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. New York: Longman.
- Swan, Michael. 1995. *Practical English Usage*. Oxford : Oxford University Press.
- 岩崎春雄・諏訪部仁。(編) 2000. 『ポケット英和辞典』 研究社.
- 太田 朗. 1980. 『否定の意味 意味論序説』 大修館書店.
- 小西友七. 1991. 『ジーニアス英和辞典』 大修館書店.
- 塚本 聡. 2011. 「2つの史的コーパス—その代表性と類似性」『英語コーパス研究』 18, 49-59.